

4. 2 河川に生息する生物の確認状況 (河川の自然度・健全度)

ここでは、生態系の健全さの指標となる食物連鎖網の上位種の猛禽類ミサゴ、チュウヒや、ヤマセミ、カワセミ、セキレイ類などの河川や水辺と関わりの深い種の生息状況を整理し、現在の河川の自然環境について検討しました。

なお、前回、前々回調査との比較は、調査の範囲や時期、回数などの条件が必ずしも同一ではありません。また、移動性の高い種や、限られた季節にしか見られない種もあることから、比較結果は同一河川での消長を示すものではなく、全国的な傾向を検討するための参考です。

【種の全国的な分布状況 (オオハクチョウ、コハクチョウ)】

(鳥類調査)

・ オオハクチョウを 6 河川、コハクチョウを 12 河川で確認

冬の渡り鳥の代表として、オオハクチョウとコハクチョウの確認状況を整理しました。今回とりまとめを行った一級河川 23 河川のうち、オオハクチョウは北海道地方の 1 河川、東北地方の 2 河川、関東地方の 2 河川、中部地方の 1 河川の計 6 河川で確認されました。コハクチョウは北海道地方の 1 河川、東北地方の 2 河川、関東地方の 3 河川、中部地方の 4 河川、中国地方の 1 河川、九州地方の 1 河川の計 12 河川で確認されました。

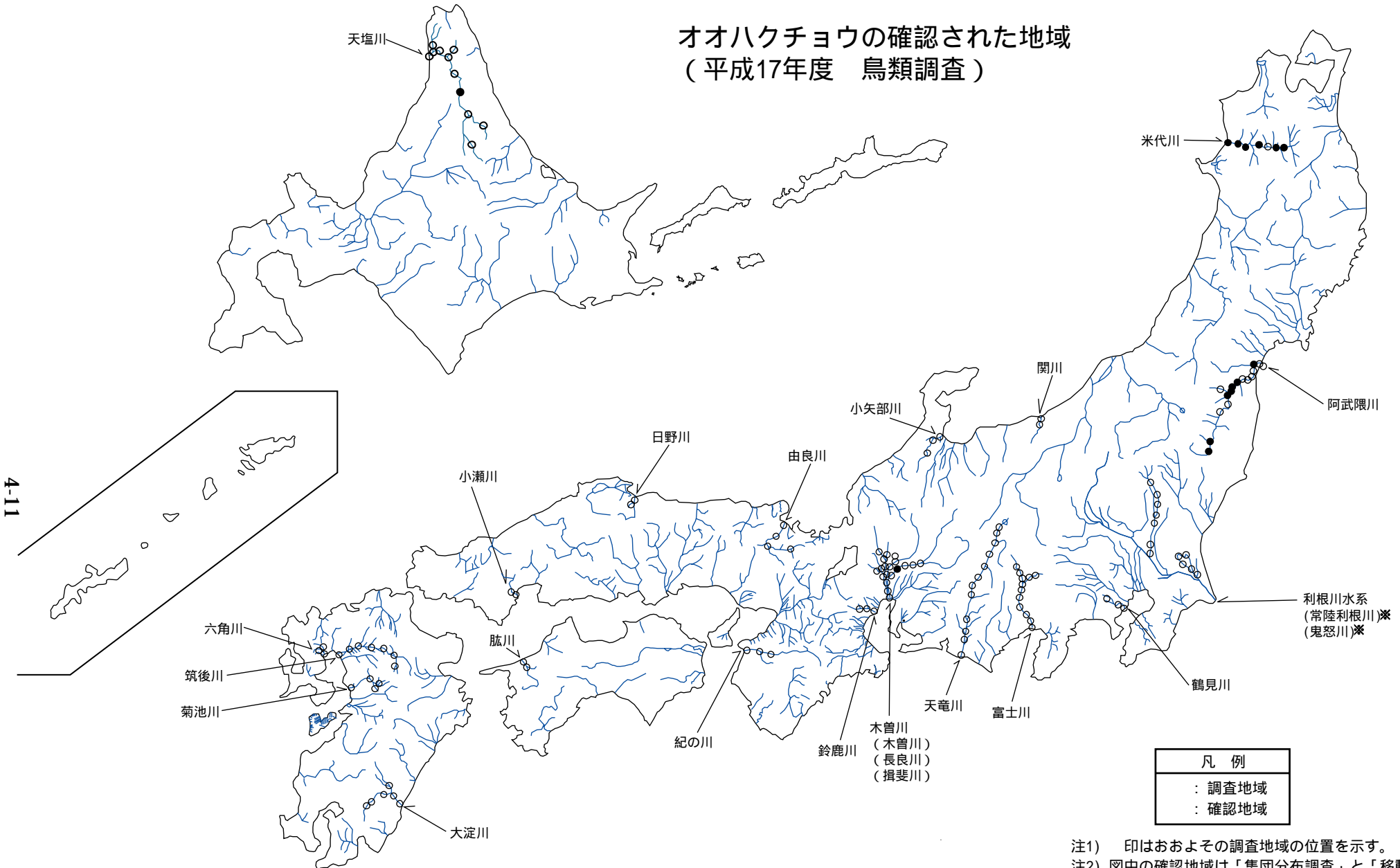
(資料掲載: 4-11 ~ 12、4-49 ページ)

オオハクチョウとコハクチョウは、ともに北日本や日本海側の河川の静水域や湖沼等に冬鳥として飛来します。今回とりまとめを行った一級河川 23 河川のうち、オオハクチョウは北海道地方の 1 河川、東北地方の 2 河川、関東地方の 2 河川、中部地方の 1 河川の計 6 河川で確認されました。コハクチョウは北海道地方の 1 河川、東北地方の 2 河川、関東地方の 3 河川、中部地方の 4 河川、中国地方の 1 河川、九州地方の 1 河川の計 12 河川で確認されました。オオハクチョウ、コハクチョウとも前々回もしくは前回と比べると、確認河川数はやや増加傾向にありました。

確認河川数の比較 (対象河川: 23 河川)

種類	前々回 調査	前回 調査	今回 調査
オオハクチョウ	3 河川	5 河川	6 河川
コハクチョウ	5 河川	6 河川	12 河川

オオハクチョウの確認された地域 (平成17年度 鳥類調査)



4-11

凡例	
○	: 調査地域
●	: 確認地域

注1) 印はおおよその調査地域の位置を示す。
 注2) 図中の確認地域は「集団分布調査」と「移動時調査」を含まないため、これらの調査でのみ確認された場合は図示されない。
 注3) 印の河川は、「集団分布調査」もしくは「移動時調査」のみでの確認であることを示す。

【高次消費者（ミサゴとチュウヒ）の確認状況】

(鳥類調査)

・ 猛禽類のミサゴは全国の一級河川の約 9 割で、チュウヒは約 5 割で確認

水辺の食物連鎖の上位種として、魚を主な餌とし水辺に関係の深いミサゴと、河川のヨシ原などに生息し、ネズミやカエル、小鳥などを餌とするチュウヒについて確認状況を整理しました。

ミサゴは、今回とりまとめを行った一級河川 23 河川のうち、22 河川で確認されました。また、チュウヒは、11 河川で確認されました。

(資料掲載：4-14～15、4-49 ページ)

ミサゴは、魚を主な餌とする猛禽類で、河川や湖、海岸などに生息しています。環境省のレッドリスト (2006) では準絶滅危惧種に指定されています。ミサゴは、今回とりまとめを行った一級河川 23 河川のうち、22 河川で確認されました。確認された調査地区の位置は、河川の河口から上流域まで広範囲でした。ミサゴが上流まで確認された河川は、採餌を行えるような広い水面と豊かな魚類資源を保った場所として注目できます。

チュウヒは主に冬鳥で、シベリア・極東から越冬のため飛来しますが、北海道や本州中部以北では繁殖することが知られています。ネズミやカエル、小鳥などの小動物を餌とし、河川の中洲のヨシ原やセイタカアワダチソウ群落、平地の広いヨシ原などに生息し、ヨシやスキの茎で地上に巣を造ります。環境省のレッドリスト (2006) では絶滅危惧 II 類に指定されています。チュウヒは、今回とりまとめを行った一級河川 23 河川のうち、11 河川で確認されました。確認された調査地区の位置は、主に河川の河口から下流域でした。確認時期をみると主に渡りの時期 (春の渡り：主に 4～5 月、秋の渡り：主に 8～9 月) か越冬期 (主に 12～2 月) で、特に利根川水系の常陸利根川で多くの個体が確認されました。また、北海道地方の天塩川では繁殖期 (主に 6～7 月) にも多くの個体が確認されました。ミサゴ、チュウヒとも前々回もしくは前回と比べると、確認河川数はやや増加傾向にありました。

確認河川数の比較 (対象河川: 23 河川)

種類	前々回 調査	前回 調査	今回 調査
ミサゴ	18 河川	20 河川	22 河川
チュウヒ	9 河川	11 河川	11 河川

チュウヒの確認時期

地方	河川名	2005年									2006年			
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
北海道	天塩川	・	・	12	・	・	・	・	4	・	・			
東北	阿武隈川		・	・	・		1				・			
関東	利根川 (常陸利根川)	13	1	・	1	2	・				38	51		
	利根川 (鬼怒川)	・	・	・		・	・				4			
	富士川			・		・	・	2			・			
北陸 中部	小矢部川		1	・			・			・	・		1	
	天竜川	・	・	・			・	・	2		1		・	
	木曾川 (木曾川)		・	・			・				2		1	
	木曾川 (長良川)		・	・			・				1		・	
	木曾川 (揖斐川)	・	・	1		・	・				2		1	
四国	肱川	・	・	・			・	・		・	・		1	

注1)チュウヒが確認された河川のみを記載した。

注2)数値は確認個体数を示し、「・」は調査は行われたが確認されなかったことを示す。

【高次消費者（オジロワシとオオワシ（天然記念物））の確認状況】

（鳥類調査）

- ・ 猛禽類のオジロワシを北海道、東北地方の3河川で、オオワシは北海道地方の1河川で確認

水辺の食物連鎖の上位種であり、また国の天然記念物でもあるオジロワシとオオワシの確認状況を整理しました。

オジロワシは、今回とりまとめを行った一級河川23河川のうち、北海道、東北地方の3河川で確認されました。また、オオワシは、北海道地方の1河川で確認されました。

（資料掲載：4-17～19、4-49ページ）

オジロワシ、オオワシは、魚や水鳥を主な餌とする大型の猛禽類です。オジロワシは北海道で繁殖し、海岸や湖沼周辺、河川流域の大木に営巣します。冬季には越冬のため本州北部や中部にも飛来します。最近は、人間の活動圏近くで営巣するつがいが増え営巣地はやや増加傾向にありますが、反面人為的影響も大きく繁殖は必ずしも安定していません。オオワシは、ロシアのオホーツク海周辺で繁殖し、越冬のため北海道や本州北部に飛来します。オジロワシ、オオワシともに、極冬期には漁業活動から供給される魚にも依存しています。また、北海道では狩猟で放置されたエゾジカの死体なども食べますが、残留した銃弾を飲み込んで鉛中毒を引き起こす個体が増加したことから、現在では鉛製銃弾によるシカ猟が禁止されています。オジロワシ、オオワシともに、国の天然記念物（文化財保護法）および国内希少野生動物種（種の保存法）に指定されており、また、環境省レッドリスト（2006）によりオジロワシは絶滅危惧 B 類、オオワシは絶滅危惧 類に指定されています。

オジロワシは、今回とりまとめを行った一級河川23河川のうち、北海道、東北地方の3河川で確認されました。また、オオワシは、北海道地方の1河川で確認されました。確認時期をみると、オジロワシは北海道の天塩川ではほぼ通年確認され、東北地方では主に越冬期でした。オオワシは越冬期に確認されました。

オジロワシ、オオワシの確認時期

【オジロワシ】

地方	河川名	2005年										2006年		
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
北海道	天塩川	・	1	6	3		1	・	4	11	6			
東北	阿武隈川		・	・	・		・				1			
	米代川		・	・			・			2			2	

注1)オジロワシが確認された河川のみを記載した。

注2)数値は確認個体数を示し、「・」は調査は行われたが確認されなかったことを示す。

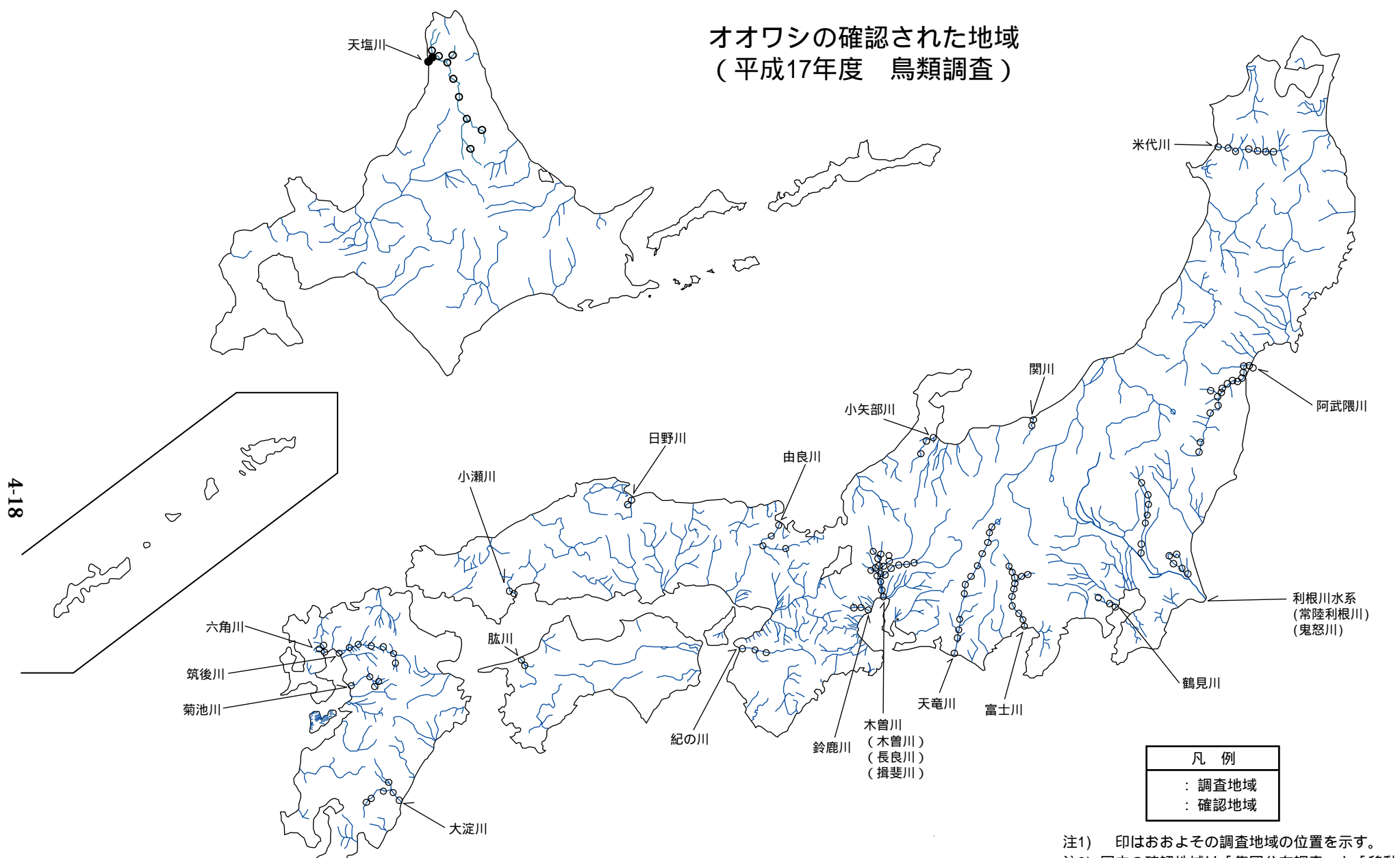
【オオワシ】

地方	河川名	2005年										2006年		
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
北海道	天塩川	・	・	・	・		・	・	・	9	・			

注1)オオワシが確認された河川のみを記載した。

注2)数値は確認個体数を示し、「・」は調査は行われたが確認されなかったことを示す。

オオワシの確認された地域 (平成17年度 鳥類調査)



凡 例	
○	: 調査地域
●	: 確認地域

- 注1) 印はおおよその調査地域の位置を示す。
- 注2) 図中の確認地域は「集団分布調査」と「移動時調査」を含まないため、これらの調査でのみ確認された場合は図示されない。
- 注3) 印の河川は、「集団分布調査」もしくは「移動時調査」のみでの確認であることを示す。

【河川に関わりの深い種（オオヨシキリ、コヨシキリ）の確認状況】

(鳥類調査)

- ・ **オオヨシキリは全国のほとんどの河川で確認、コヨシキリは11河川で確認**
 ヨシ原で繁殖する代表的な鳥であるオオヨシキリとコヨシキリの確認状況を整理しました。

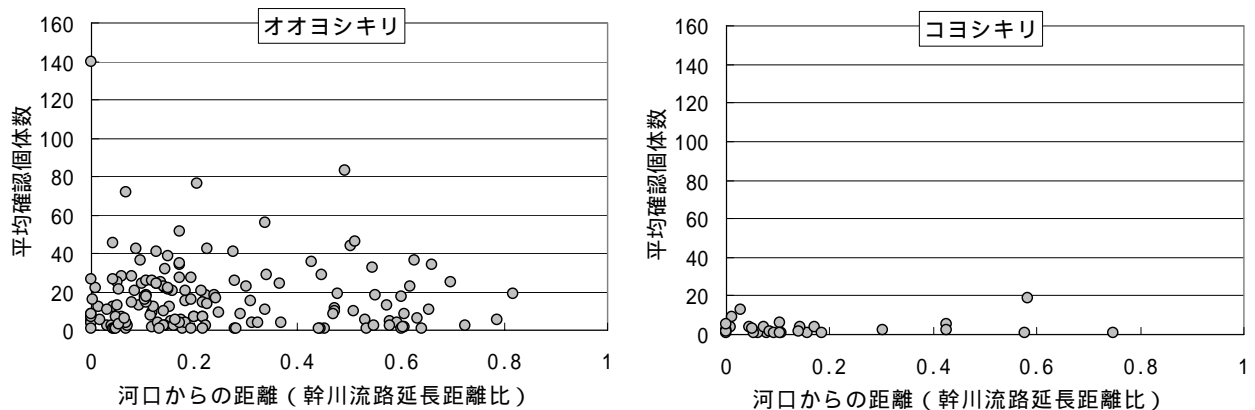
オオヨシキリは、今回とりまとめを行った一級河川 23 河川中 22 河川で確認されました。コヨシキリは 11 河川で確認されました。

(資料掲載： 4-20～21、 4-50 ページ)

オオヨシキリは全国のヨシ原に広く分布する種です。コヨシキリも同様に全国のヨシ原に生息しますが、西日本では標高の高いところの背の高い草原で繁殖します。両種は、ともに昆虫類等を餌とします。

オオヨシキリは、今回とりまとめを行った一級河川 23 河川中 22 河川で確認され、本州では概ね河川の下流から上流まで広く確認されました。コヨシキリは、北海道、本州の 11 河川で確認されました。

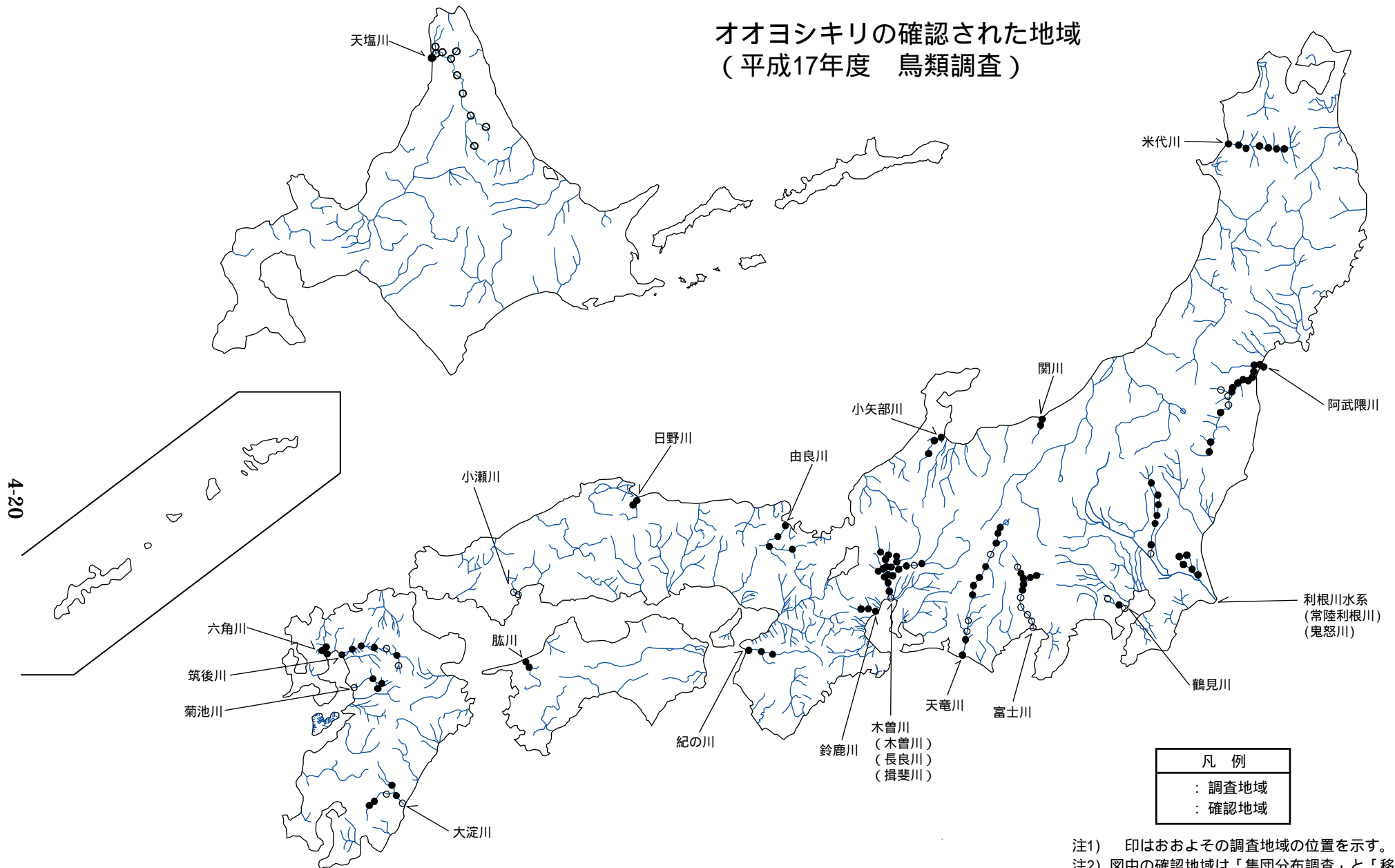
オオヨシキリ、コヨシキリの繁殖期における 1 調査地区当りの確認個体数とその調査地区の河口からの距離を下図に示しました。オオヨシキリは 50 個体以上確認された調査地区もみられました。コヨシキリはいずれの調査地区でも 20 個体未満でした。



注 1) 確認個体数は 1 調査地区における繁殖期間中の 1 回当りの確認個体数。
 注 2) 河口からの距離は流路延長に対する比率で示した。

オオヨシキリ、コヨシキリの繁殖期における確認個体数

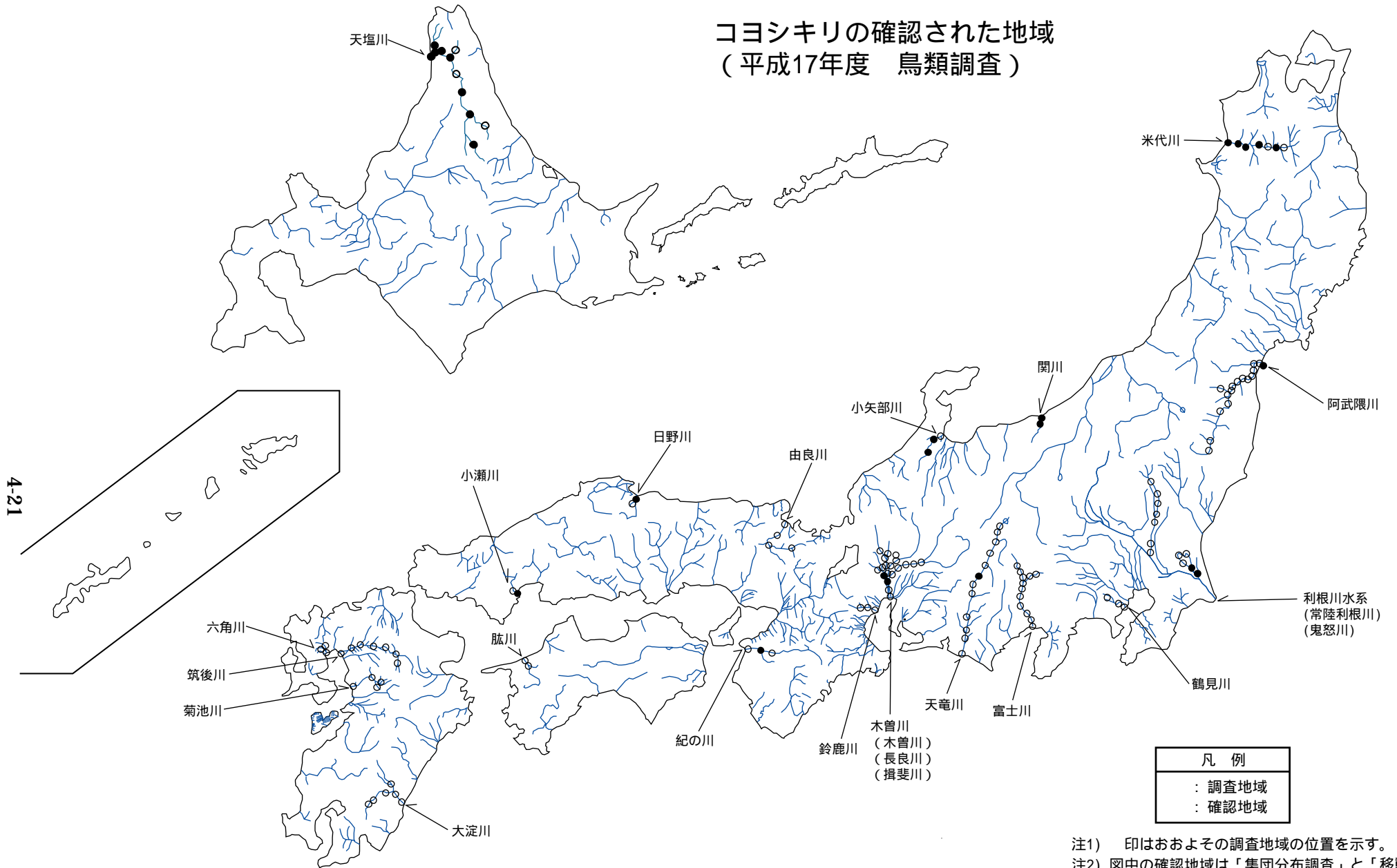
オオヨシキリの確認された地域 (平成17年度 鳥類調査)



4-20

- 注1) 印はおおよその調査地域の位置を示す。
 注2) 図中の確認地域は「集団分布調査」と「移動時調査」を含まないため、これらの調査でのみ確認された場合は図示されない。
 注3) 印の河川は、「集団分布調査」もしくは「移動時調査」のみでの確認であることを示す。

コヨシキリの確認された地域 (平成17年度 鳥類調査)



4-21

- 注1) 印はおおよその調査地域の位置を示す。
 注2) 図中の確認地域は「集団分布調査」と「移動時調査」を含まないため、これらの調査でのみ確認された場合は図示されない。
 注3) 印の河川は、「集団分布調査」もしくは「移動時調査」のみでの確認であることを示す。

【河川に関わりの深い種（カイツブリ）の確認状況】

(鳥類調査)

・ カイツブリは全国の河川で確認

ヨシの茂みの中や水草の上に浮巣を造り、水辺に依存性の強いカイツブリの確認状況を整理しました。

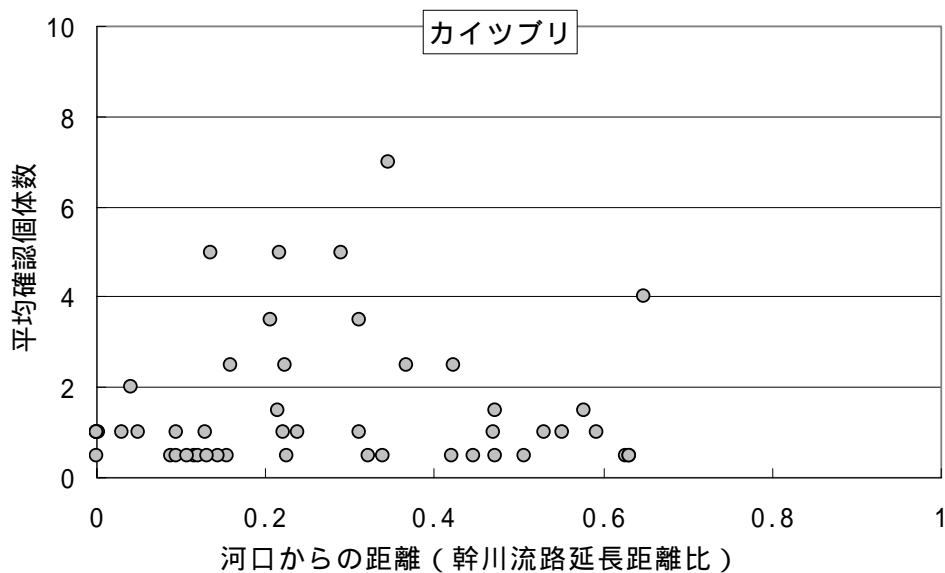
カイツブリは、今回とりまとめを行った一級河川 23 河川すべてで確認されました。

(資料掲載：4-23、4-50 ページ)

カイツブリは、ヨシの茂みの中や水草の上に浮巣を造り、主に小魚や甲殻類、水生昆虫、貝類などを餌としています。西日本ではほぼ周年見られます。縄張り性が強く、本州の太平洋岸や西南日本では一年中つがいで縄張りを形成します。

カイツブリは、今回とりまとめを行った一級河川 23 河川すべてで確認されました。確認位置をみると、全国の河川の河口付近から上流までの広範囲にわたって確認されました。

カイツブリの繁殖期における 1 調査地区における確認個体数とその調査地区の河口からの距離を下図に示しました。カイツブリの確認個体数は、すべて 10 個体未満でしたが、河口域や上流で少ない傾向がみられました。

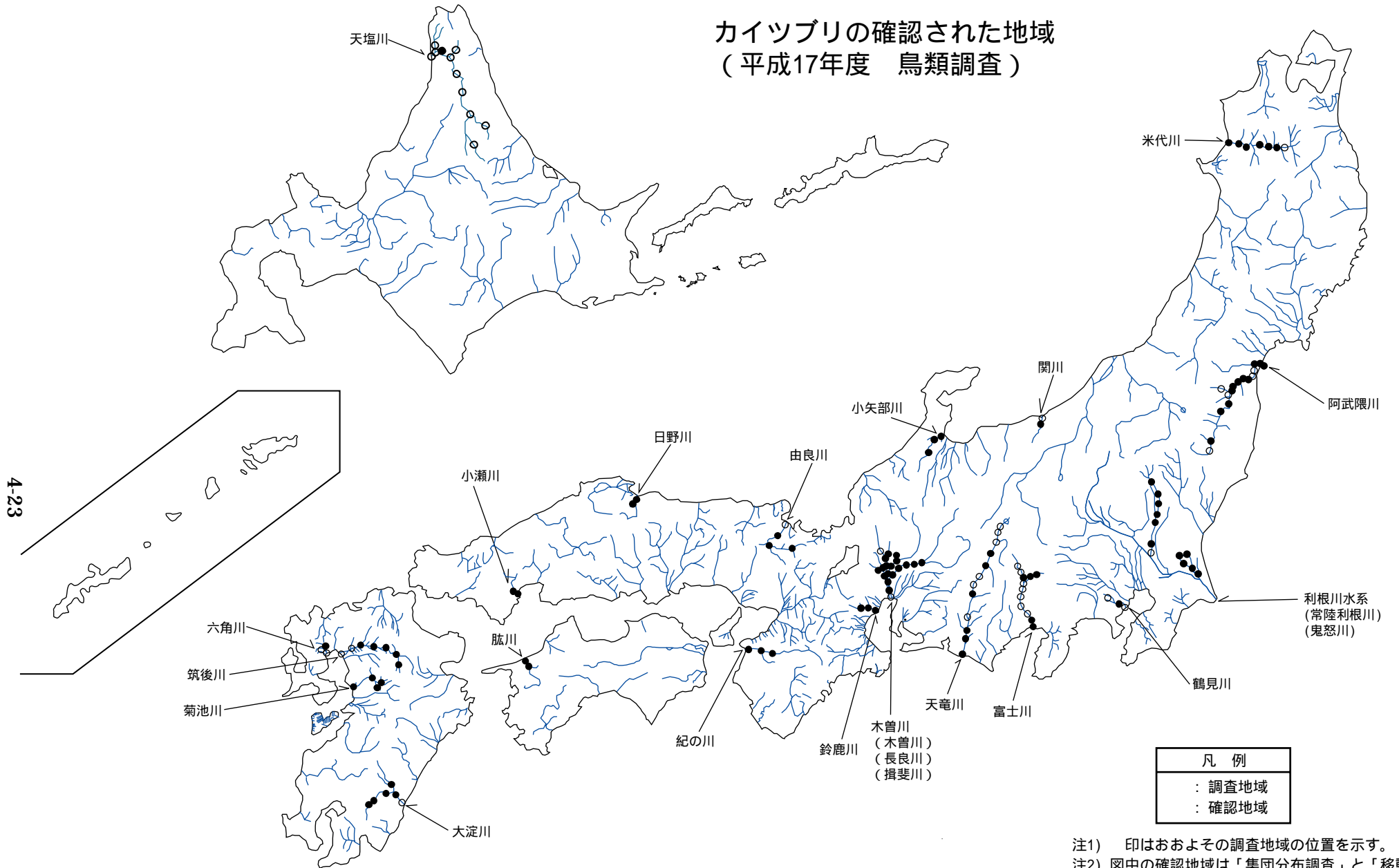


注 1) 確認個体数は 1 調査地区における繁殖期間中の 1 回当たりの確認個体数。

注 2) 河口からの距離は流路延長に対する比率で示した。

カイツブリの繁殖期における確認個体数

カイツブリの確認された地域 (平成17年度 鳥類調査)



4-23

凡例	
○	調査地域
●	確認地域

- 注1) 印はおおよその調査地域の位置を示す。
- 注2) 図中の確認地域は「集団分布調査」と「移動時調査」を含まないため、これらの調査でのみ確認された場合は図示されない。
- 注3) 印の河川は、「集団分布調査」もしくは「移動時調査」のみでの確認であることを示す。

・ **カワウを全国のほとんどの河川で確認**
 魚を餌とし、河畔林などに営巣地を持つカワウの確認状況を整理しました。
 カワウは、今回とりまとめを行った一級河川 23 河川のうち、22 河川で確認されました。
 (資料掲載： 4-25、 4-50 ページ)

確認河川数の比較 (対象河川： 23 河川)

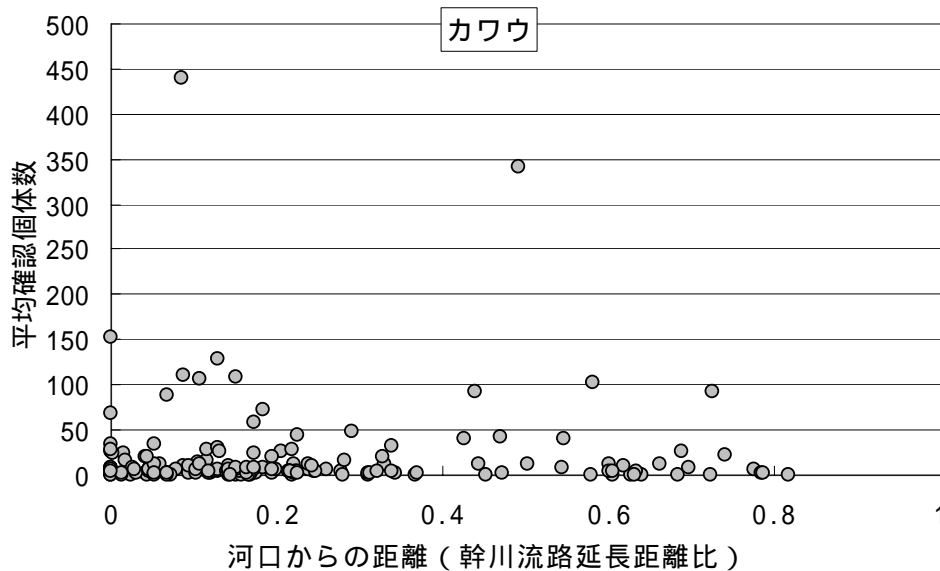
種類	前々回 調査	前回 調査	今回 調査
カワウ	19 河川	21 河川	22 河川

カワウは、内湾部や内陸の淡水、河川、湖沼などに生息し、その近くの林などで集団繁殖します。一年を通して群れで生活し、水かきのついた足を使い、尾を舵にして巧みに潜水し、魚類や甲殻類を捕らえます。一時は個体数の減少が心配されたこともありますが、近年増加し、一部の地域では放流されたアユ、アマゴ、ニジマス等に食害を与えている例も知られています。

カワウは、今回とりまとめを行った一級河川 23 河川のうち、22 河川で確認されました。確認範囲を見ると、ほとんどの河川で河口から上流まで広範囲で確認されていました。

カワウの繁殖期における確認個体数とその調査地区の河口からの距離を下図に示しました。カワウは、河口域から下流域で多数観察される傾向にあり、北海道の天塩川（440 個体）や天竜川（342 個体）のように 1 調査地区で 300 個体以上観察された河川もありました。

確認河川数は、前々回、前回と比べるとやや増加傾向にありました。



注 1) 確認個体数は 1 調査地区における繁殖期間中の 1 回当りの確認個体数。
 注 2) 河口からの距離は流路延長に対する比率で示した。

カワウの繁殖期における確認個体数

【河川に関わりの深い種（カワセミとヤマセミ）の確認状況】

(鳥類調査)

・ カワセミは日本全国の河川で、ヤマセミは約6割の河川で確認

小魚を餌とし、土の崖地などを営巣場所とするカワセミとヤマセミの確認状況を整理しました。

カワセミは、今回とりまとめを行った一級河川 23 河川すべて確認されました。またヤマセミは、14 河川で確認されました。

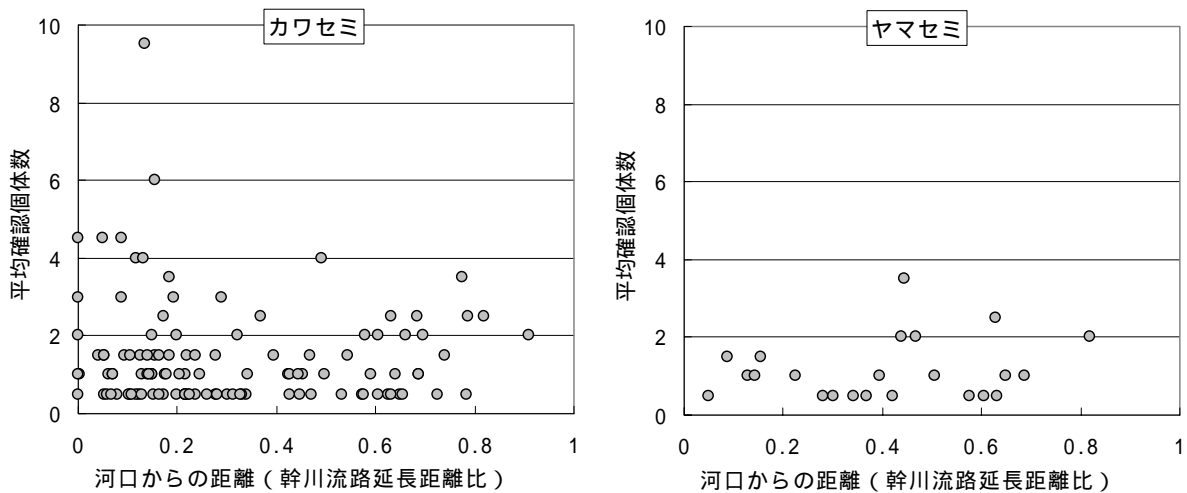
(資料掲載：4-27～28、4-50 ページ)

カワセミとヤマセミは、ともに北海道地方から九州地方まで広く生息します。カワセミは、北海道では夏鳥、本州以南では留鳥（1年を通してみられる鳥）であり、ヤマセミは、全国で留鳥です。主に河川や池沼で小魚を餌として生活しており、営巣場所には土の崖地などが必要です。ヤマセミは主に山地や中流域に生息し、カワセミは上流から海岸近くまで生息します。

カワセミは、今回とりまとめを行った一級河川 23 川すべてで確認されました。確認された調査地区は下流から上流に至る広範囲にわたっていました。

ヤマセミは、今回とりまとめを行った 23 河川のうち、14 河川で広く確認されました。確認された調査地区は概ね上流から中流域でした。

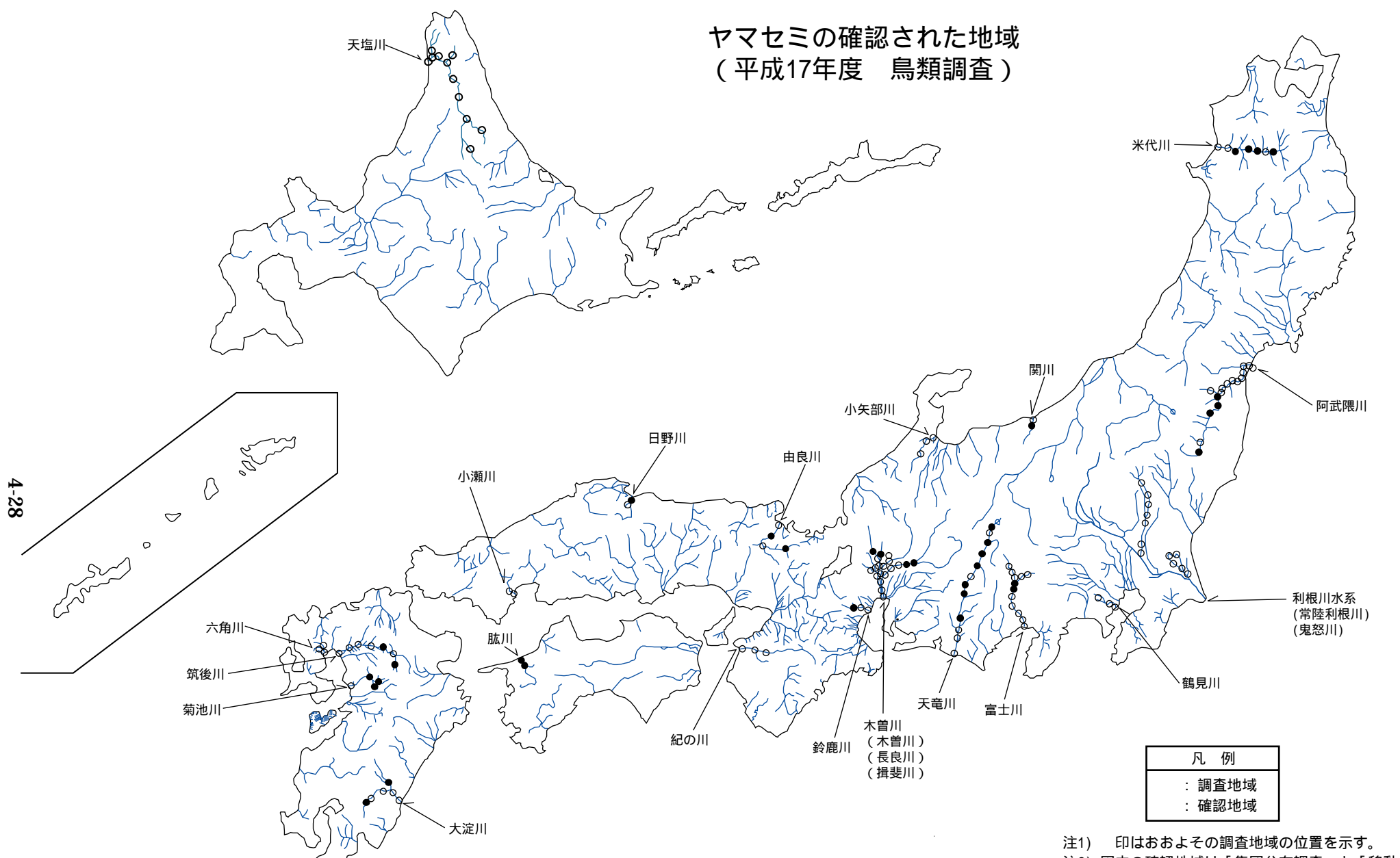
カワセミとヤマセミの繁殖期における 1 調査地区当りの確認個体数とその調査地区の河口からの距離を下図に示しました。カワセミ、ヤマセミとも 1 調査地区当たりの確認個体数は少なく、概ね 5 個体以下でした。



注 1) 確認個体数は 1 調査地区における繁殖期間中の 1 回当りの確認個体数。
 注 2) 河口からの距離は流路延長に対する比率で示した。

カワセミ、ヤマセミの繁殖期における確認個体数

ヤマセミの確認された地域 (平成17年度 鳥類調査)



4-28

注1) 印はおおよその調査地域の位置を示す。
 注2) 図中の確認地域は「集団分布調査」と「移動時調査」を含まないため、これらの調査でのみ確認された場合は図示されない。
 注3) 印の河川は、「集団分布調査」もしくは「移動時調査」のみでの確認であることを示す。

【河川に関わりの深い種（キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ）の確認状況】

(鳥類調査)

- ・ 水辺の鳥であるキセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイを全国のほとんどの河川で確認

良好な河川環境を考えるうえで、河川や水辺に関わりの深いキセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイの確認状況を整理しました。

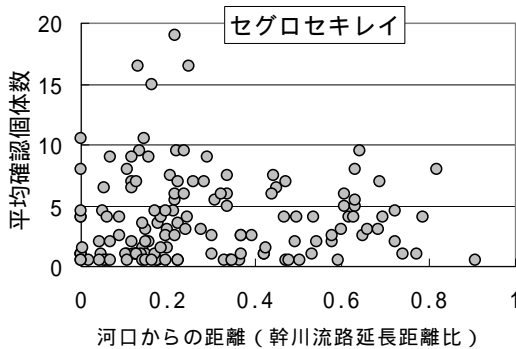
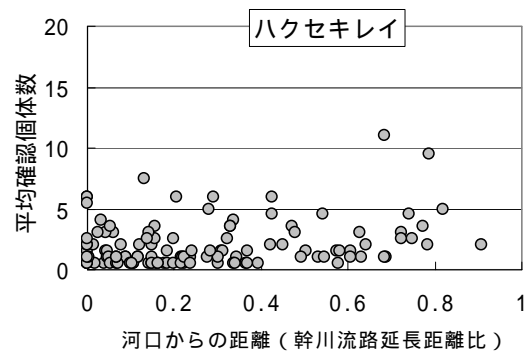
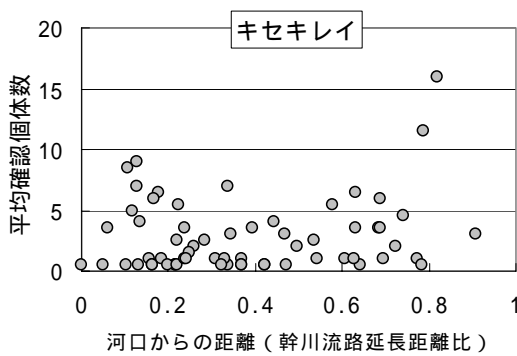
今回とりまとめを行った一級河川 23 河川のうち、キセキレイ、ハクセキレイは全ての河川、セグロセキレイは 22 河川と、3 種ともほとんどの河川で確認されました。

(資料掲載： 4-30～32、4-50,51 ページ)

キセキレイは、日本では九州以北で繁殖し、冬は本州中部以南に普通にみられます。平地から山地の川、湖沼の近くに生息します。ハクセキレイは、日本では 50 年ほど前までは本州北部以北が繁殖地でしたが、近年では南進し本州中部以北と九州、中国地方の一部で繁殖するほか、冬鳥として多数飛来し、冬は本州以南に普通にみられます。海岸、河口、広い河原や水田に生息し、川の上流や山地の水辺には少ないといわれています。セグロセキレイは、主に日本に分布し、北海道から九州まで繁殖し、ほとんどの地方で一年中みられます。中流域の広い河原や湖沼の近くに生息し、都会でも近くに水辺があれば生息できます。

3 種とも、今回とりまとめを行った一級河川 23 河川のほとんどの河川で確認され、観察範囲も河川の広い範囲にわたりました。

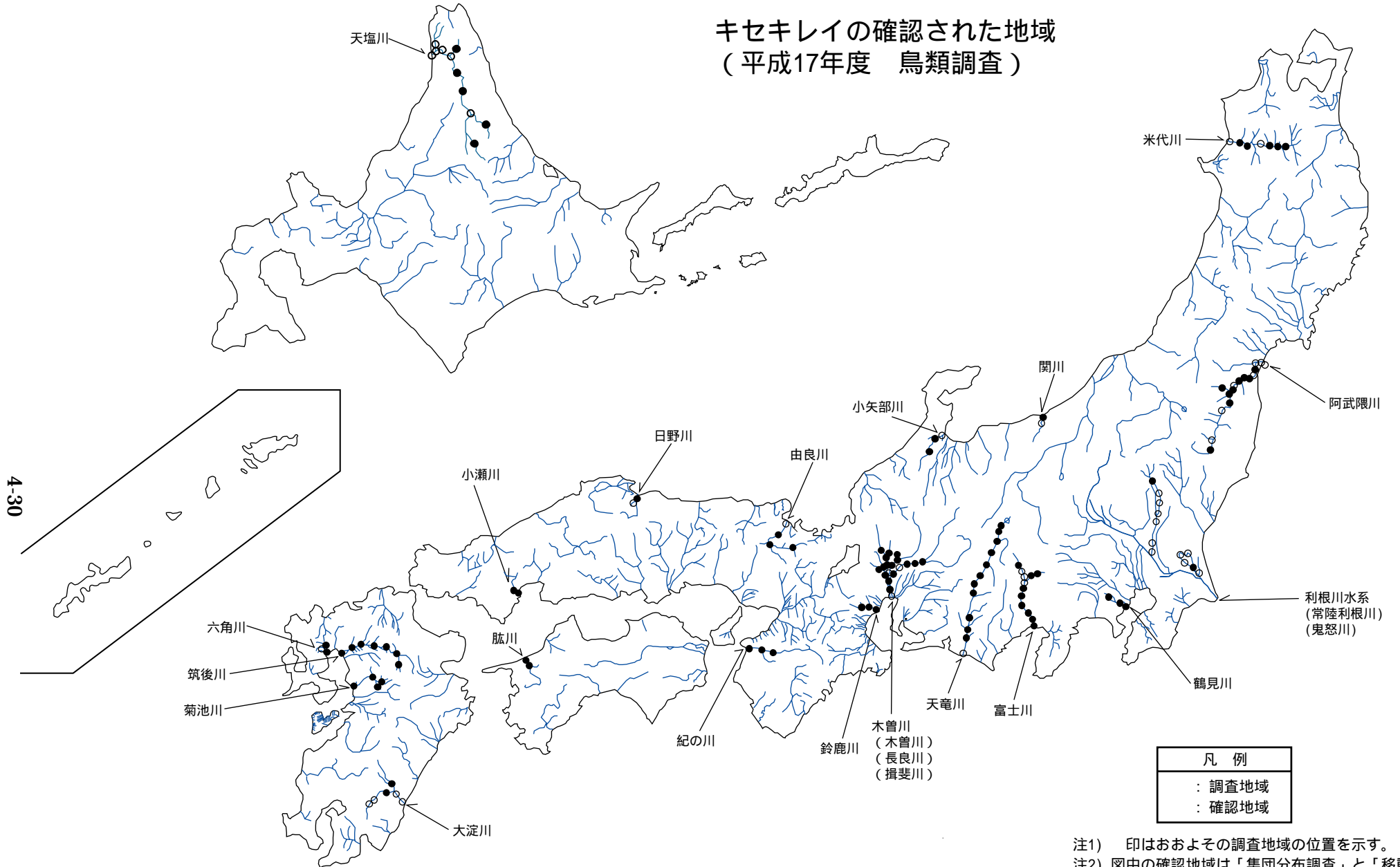
キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイの繁殖期における 1 調査地区当りの確認個体数とその調査地区の河口からの距離を下図に示しました。キセキレイ、ハクセキレイは、1 調査地区当りの確認個体数は 5 個体以下の河川が多く、セグロセキレイは 5 個体以上確認された河川が多い傾向がありました。



- 1) 確認個体数は 1 調査地区における繁殖期間中の 1 回当りの確認個体数。
- 2) 河口からの距離は流路延長に対する比率で示した。

キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイの繁殖期における確認個体数

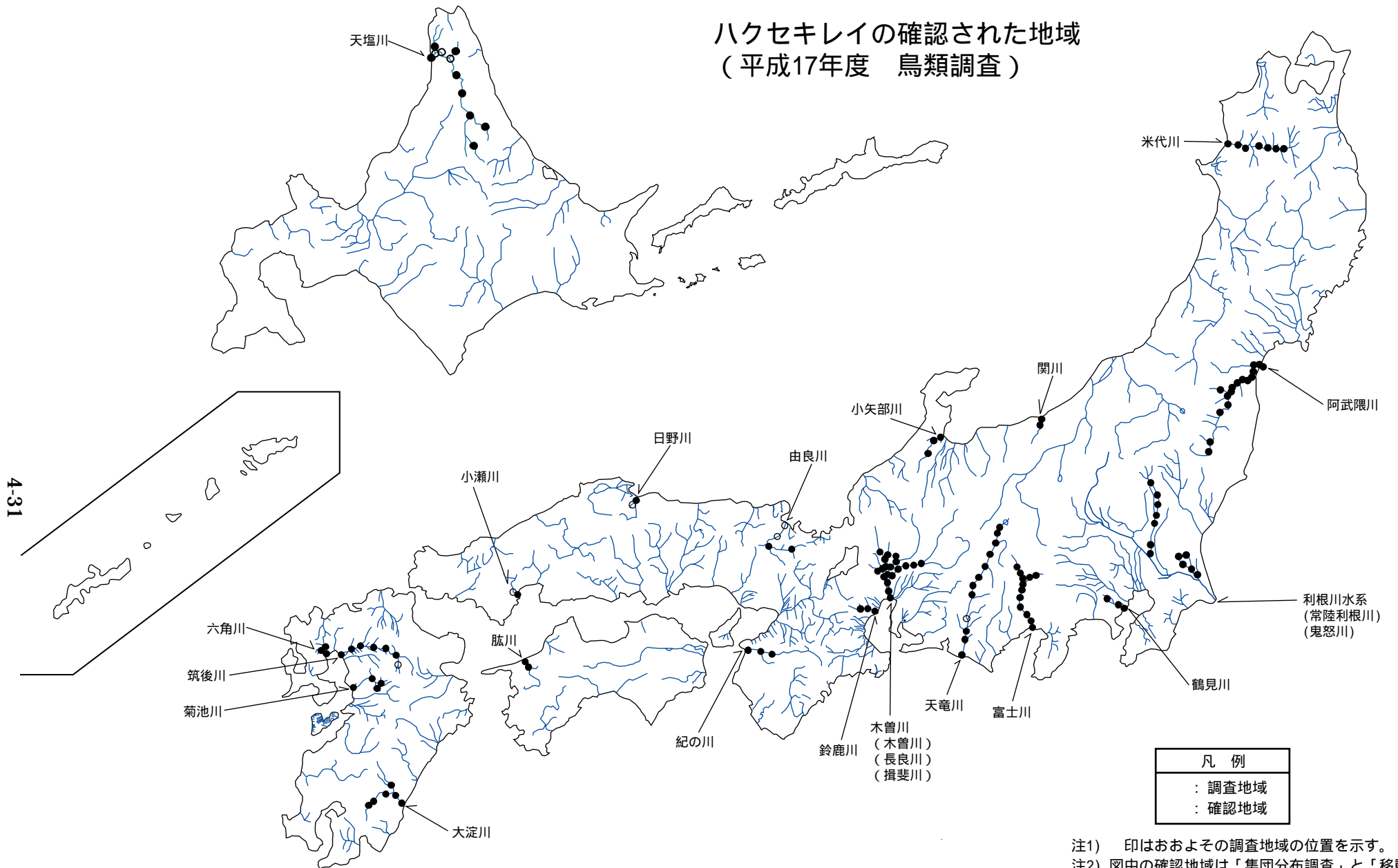
キセキレイの確認された地域 (平成17年度 鳥類調査)



4-30

- 注1) 印はおおよその調査地域の位置を示す。
 注2) 図中の確認地域は「集団分布調査」と「移動時調査」を含まないため、これらの調査でのみ確認された場合は図示されない。
 注3) 印の河川は、「集団分布調査」もしくは「移動時調査」のみでの確認であることを示す。

ハクセキレイの確認された地域 (平成17年度 鳥類調査)



- 注1) 印はおおよその調査地域の位置を示す。
 注2) 図中の確認地域は「集団分布調査」と「移動時調査」を含まないため、これらの調査でのみ確認された場合は図示されない。
 注3) 印の河川は、「集団分布調査」もしくは「移動時調査」のみでの確認であることを示す。

【河川に関わりの深い種（カワガラス）の確認状況】

(鳥類調査)

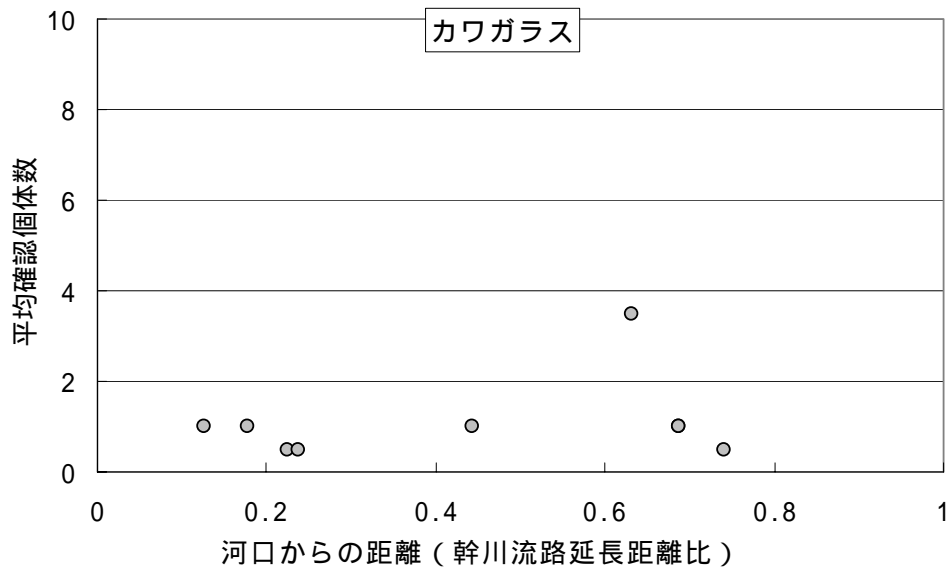
- ・ **カワガラスは全国の約4割の河川で確認**

水生昆虫を餌とするカワガラスの確認状況を整理しました。

カワガラスは、今回とりまとめを行った一級河川23河川のうち、日本全国の10河川で確認されました。

(資料掲載：4-34、4-51 ページ)

カワガラスは、水生昆虫などを餌として生活しています。滝の裏や堰堤の水抜き穴などを営巣場所とし、主に水質の良好な上流域を生息場所としています。カワガラスは、今回とりまとめを行った一級河川28河川のうち、日本全国の10河川で確認されました。確認位置は、主に中流～上流域でした。繁殖期における1調査地区当りの確認個体数は、概ね1～2個体でした。

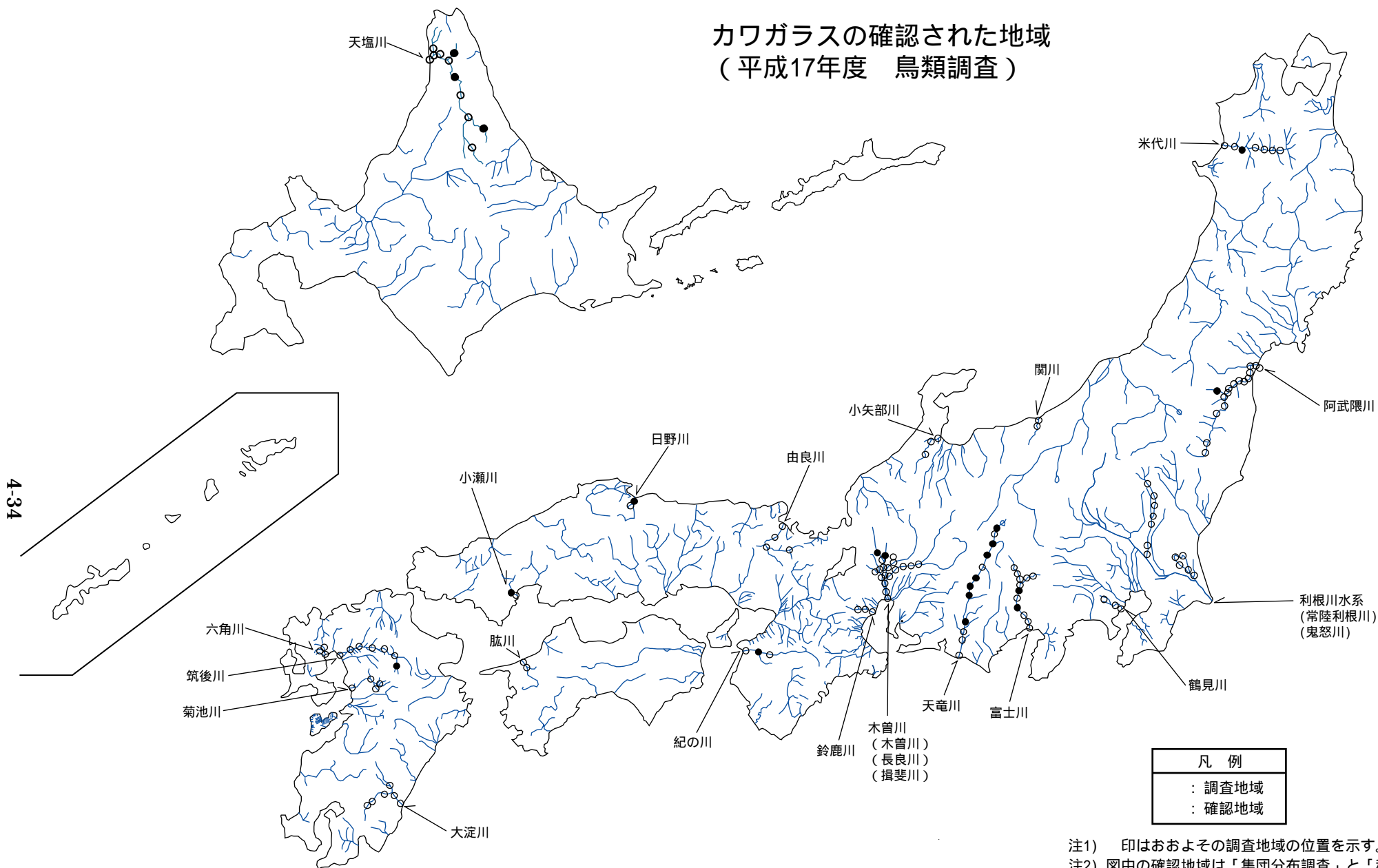


注1) 確認個体数は1調査地区における繁殖期間中の1回当りの確認個体数。

注2) 河口からの距離は流路延長に対する比率で示した。

カワガラスの繁殖期における確認個体数

カワガラスの確認された地域 (平成17年度 鳥類調査)



4-34

- 注1) 印はおおよその調査地域の位置を示す。
 注2) 図中の確認地域は「集団分布調査」と「移動時調査」を含まないため、これらの調査でのみ確認された場合は図示されない。
 注3) 印の河川は、「集団分布調査」もしくは「移動時調査」のみでの確認であることを示す。

【河川に関わりの深い種（コアジサシ、コチドリ、イカルチドリ）の確認状況】（鳥類調査）

- ・ 砂礫河原で営巣するコアジサシを本州以南の河川の約6割、コチドリ、イカルチドリを全国のほとんどの河川で確認

河川での砂礫河原や砂洲の状況を把握するため、砂礫地で営巣するコアジサシ、コチドリ、イカルチドリの確認状況を整理しました。

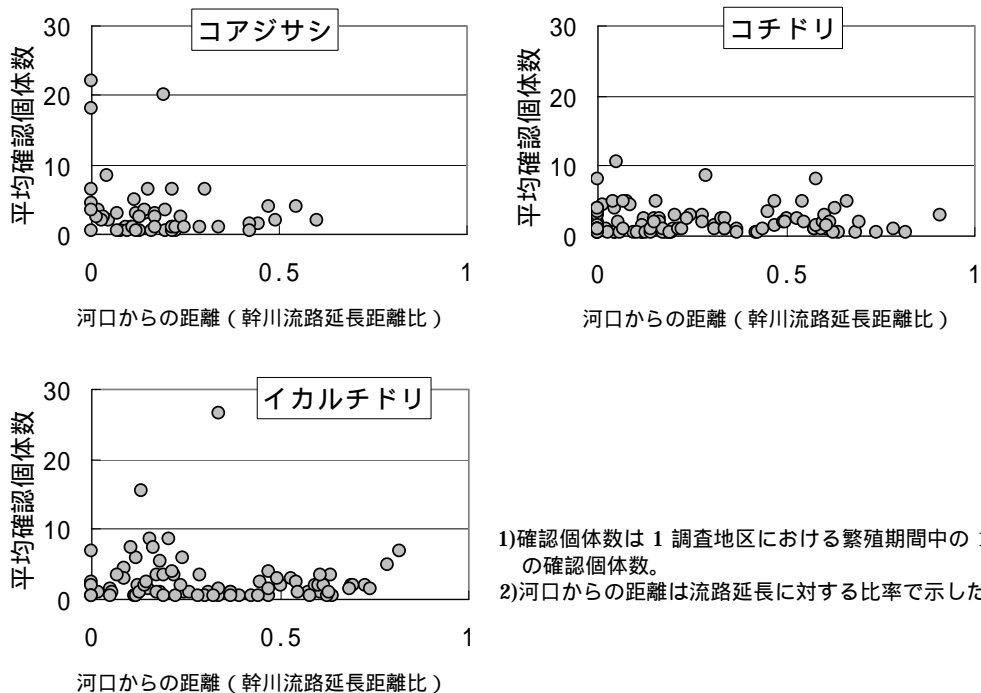
コアジサシは、今回とりまとめを行った一級河川 23 河川のうち、13 河川で確認されました。また、コチドリは 22 河川、イカルチドリは 21 河川と全国のほとんどの河川で確認され、確認位置も河川の広い範囲にわたっていました。

（資料掲載：4-36～38、4-51 ページ）

コアジサシは赤道を越えてオーストラリアから渡ってくる夏鳥です。日本では本州以南（西）でみられ、海岸や大きな川の河口や中洲のような、砂や砂利の上に簡単な巣を作って2～3個の卵を産みます。数が減少しているといわれ、環境省のレッドリスト（2006）では絶滅危惧II類に指定されています。コチドリは、主に夏鳥として飛来し、川の中流から下流の砂礫河原、海岸の砂丘や埋立地などに営巣し、全国で繁殖します。イカルチドリは、日本では留鳥として本州以南（西）で繁殖します。主な生息場所は、コチドリよりも上流の河原で、氾濫原の礫の多いところで営巣し、砂や土の多い埋立地では繁殖しません。

コアジサシは、今回とりまとめを行った一級河川 23 河川のうち、本州以南の 13 河川で確認されました。また、コチドリは 22 河川、イカルチドリは 21 河川と全国のほとんどの河川で確認され、確認位置も河川の広い範囲にわたっていました。

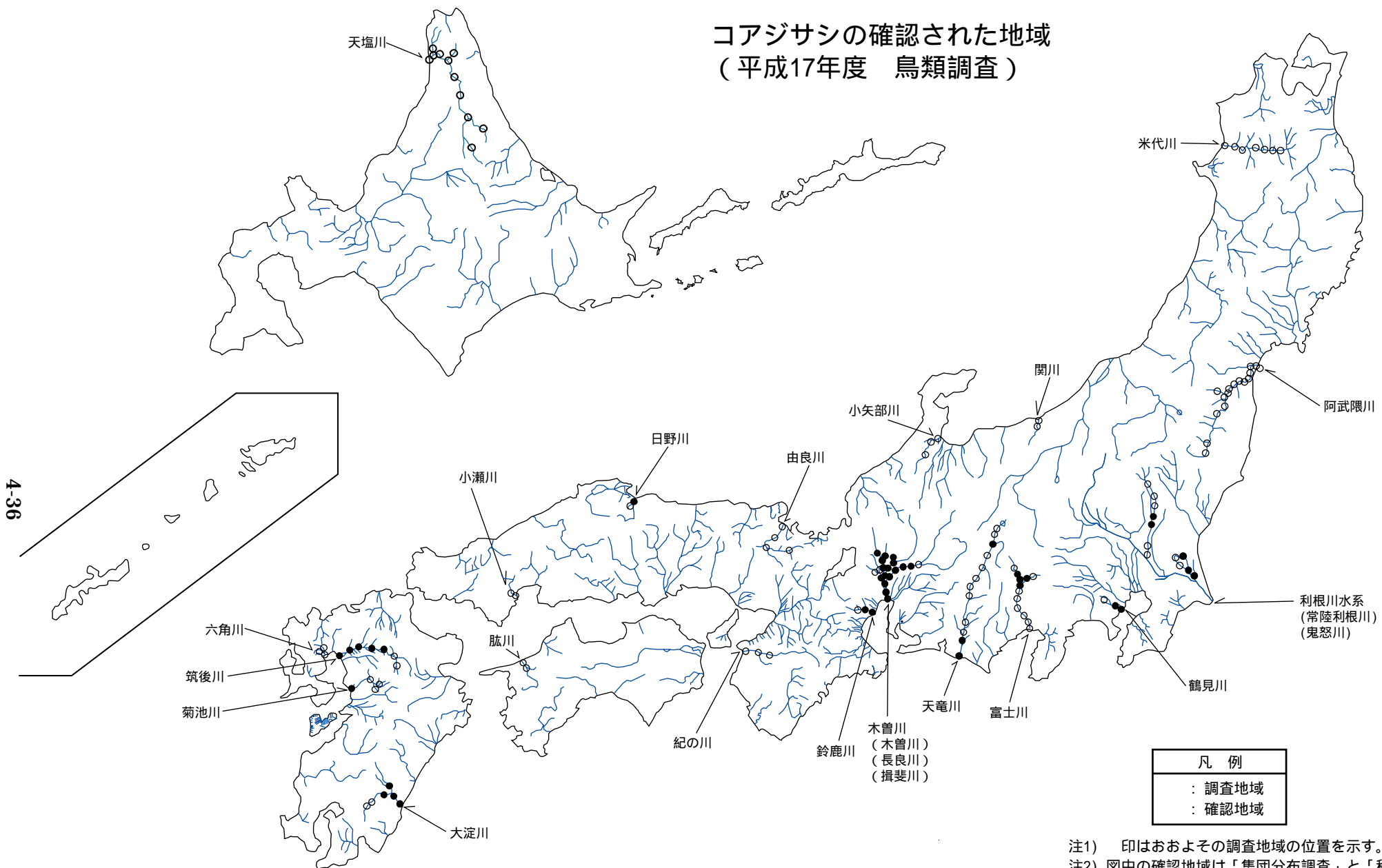
コアジサシ、コチドリ、イカルチドリの繁殖期における1調査地区当りの確認個体数とその調査地区の河口からの距離を下図に示しました。コアジサシが河口付近で確認個体数のやや多かった調査地区がみられた他は、概ね10個体以下でした。また、コアジサシに比べて、コチドリ、イカルチドリはより上流まで確認される傾向がみられました。



- 1) 確認個体数は1調査地区における繁殖期間中の1回当の確認個体数。
- 2) 河口からの距離は流路延長に対する比率で示した。

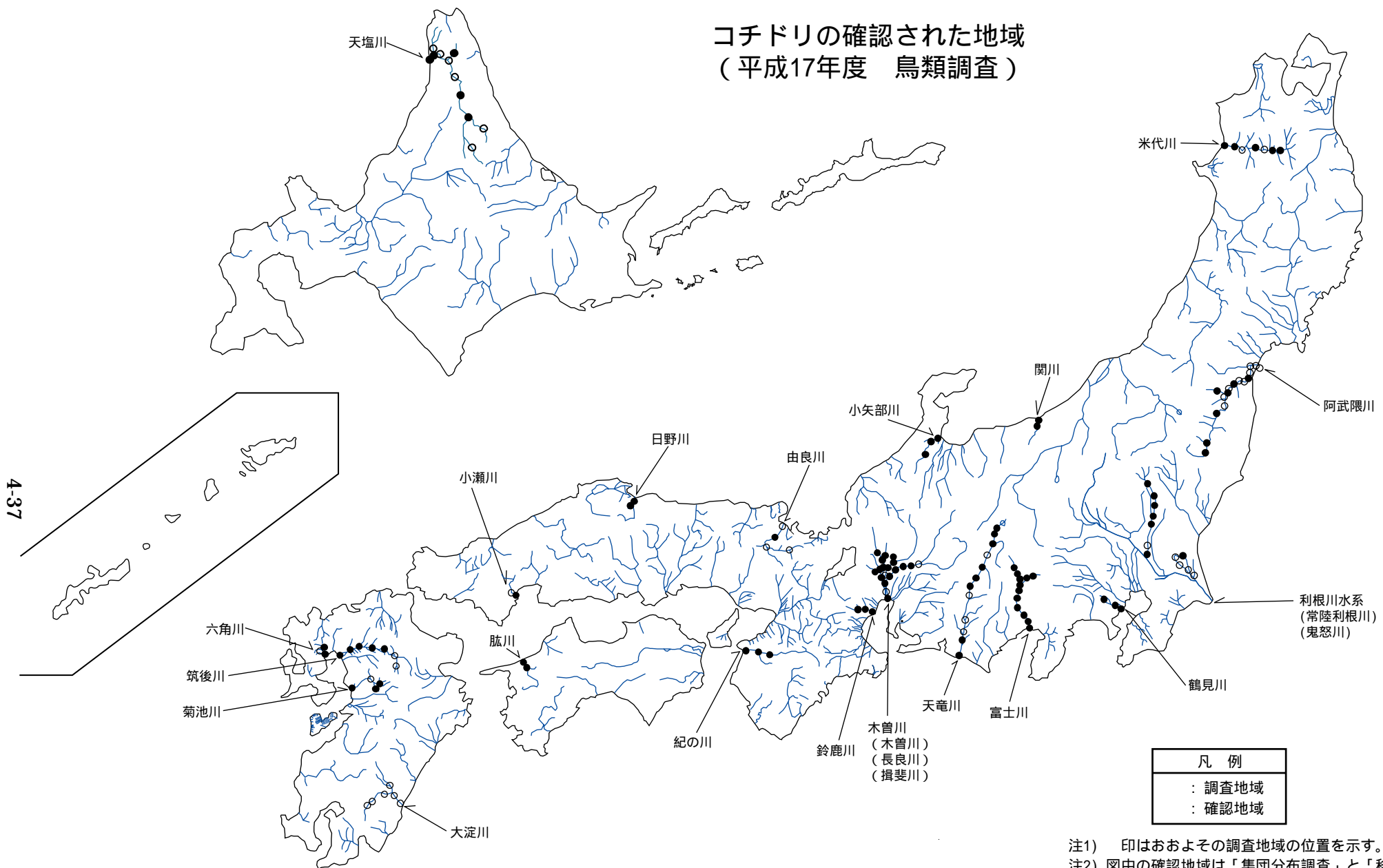
コアジサシ、コチドリ、イカルチドリの繁殖期における確認個体数

コアジサシの確認された地域 (平成17年度 鳥類調査)



- 注1) 印はおおよその調査地域の位置を示す。
 注2) 図中の確認地域は「集団分布調査」と「移動時調査」を含まないため、これらの調査でのみ確認された場合は図示されない。
 注3) 印の河川は、「集団分布調査」もしくは「移動時調査」のみでの確認であることを示す。

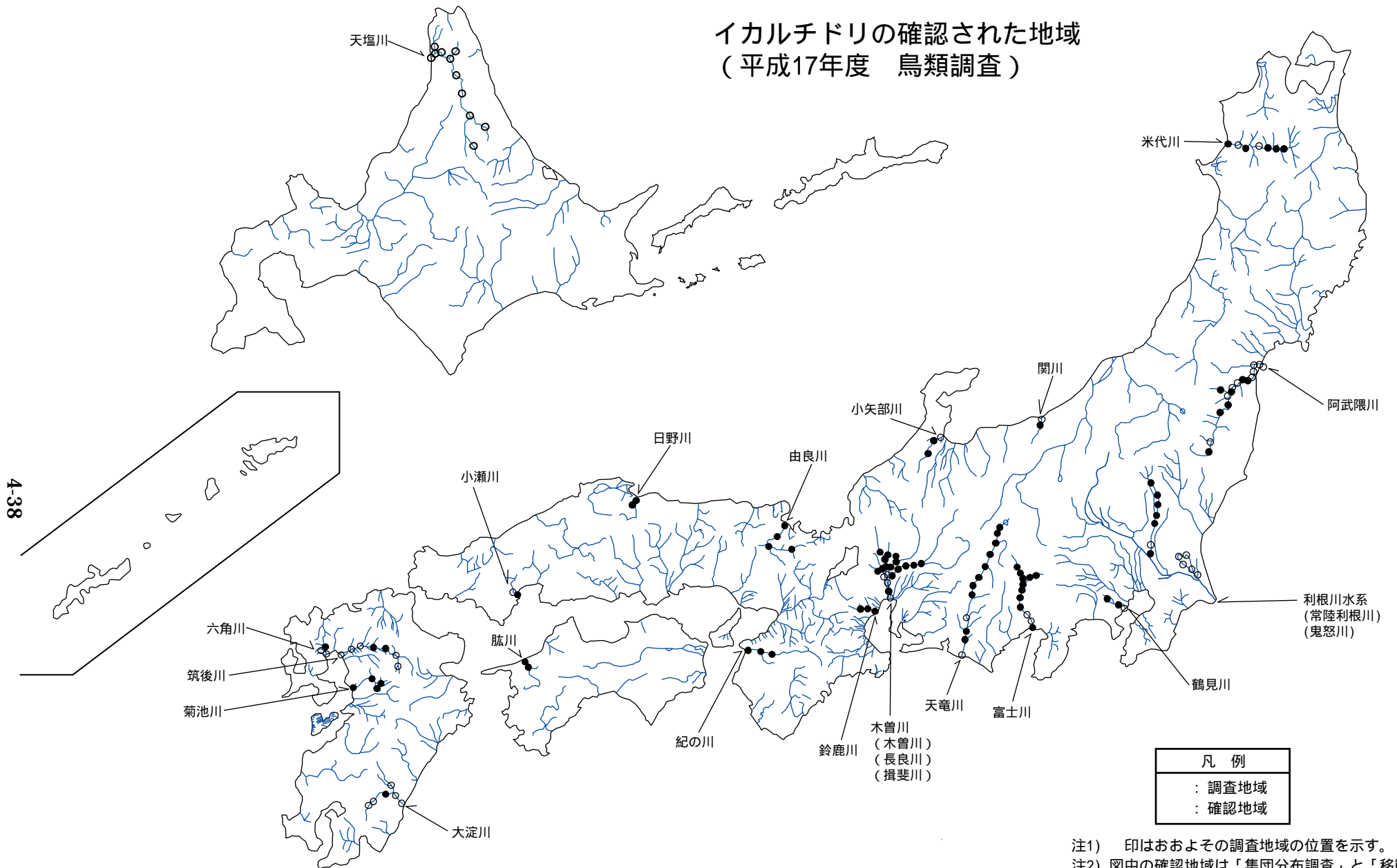
コチドリの確認された地域 (平成17年度 鳥類調査)



4-37

注1) 印はおおよその調査地域の位置を示す。
 注2) 図中の確認地域は「集団分布調査」と「移動時調査」を含まないため、これらの調査でのみ確認された場合は図示されない。
 注3) 印の河川は、「集団分布調査」もしくは「移動時調査」のみでの確認であることを示す。

イカルチドリの確認された地域 (平成17年度 鳥類調査)



4-38

- 注1) 印はおおよその調査地域の位置を示す。
 注2) 図中の確認地域は「集団分布調査」と「移動時調査」を含まないため、これらの調査でのみ確認された場合は図示されない。
 注3) 印の河川は、「集団分布調査」もしくは「移動時調査」のみでの確認であることを示す。

【河川に関わりの深い種（ハマシギ）の確認状況】

(鳥類調査)

・ ハマシギは全国河川の約6割で確認

河川での干潟の状況を考える上で、日本に広く分布し、干潟を利用するハマシギの確認状況を整理しました。

ハマシギは、今回とりまとめを行った一級河川23河川のうち、全国の14河川で確認されました。また、全国の広い範囲で越冬していることがうかがえました。

(資料掲載：4-40、4-51ページ)

ハマシギは、日本全国の干潟に飛来する渡り鳥で、北海道、東北地方では主に旅鳥、関東以南(西)では主に冬鳥です。ゴカイや小型の甲殻類などを食べます。広大な干潟や河口の砂州や岸边などで、多くのハマシギが集まって群れで活動します。ハマシギは、今回とりまとめを行った一級河川23河川のうち、全国の14河川で確認され、また、関東以南の広い範囲で越冬していることがうかがえました。

ハマシギの確認時期

地方	河川名	2005年										2006年				
		3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
北海道	天塩川		・	・	・	・		・	・	9	・	・				
関東	利根川(常陸利根川)		258	・	・	・	・	・				・	・			
	利根川(鬼怒川)		・	・	・			・				67				
	富士川				・		・	・	4			52				
北陸	小矢部川			・	・			・			4	・		・		
中部	天竜川		1	1	・			・	・	22		20			・	
	木曽川(木曽川)			2	・			・				60				
	木曽川(長良川)			・	・			・				33		・		
	木曽川(揖斐川)			・	・			・				・		16		
	鈴鹿川		・	・		・			・		123			55	69	・
九州	筑後川	474	39					(112)	(2)			(503)				
	六角川		・		・			・				152				
	菊池川			357	・			・	・			23		20		
	大淀川		・	・	・				17			・	・			

注1)ハマシギが確認された河川のみを記載した。

注2)数値は確認個体数を示し、「・」は調査は行われたが確認されなかったことを示す。

注3) および()は2004年度調査である。

